

白虎隊の「義」伝えたい

白虎隊の会

b y a k k o t a i n o k a i

会誌 9号

Vol.9 2019年4月



目 次

戊辰150年をふり返って	飯沼一元……2 - 3
會津藩子孫隊いざ出陣	森川敬寿……4 - 5
寄稿1：子孫隊に参加して	前川佳菜子…6・7
寄稿2：初めての子孫隊	東 英夫……7・8
寄稿3：いざ子孫隊出陣！	水島勝壽…………9
寄稿4：子孫隊に参加して	松崎寛志…………10
寄稿5：子孫隊に参加して	芦澤直太郎………11

會

発行者 白虎隊の会

白河戊辰150周年記念事業	安司弘子……12 - 13
會津野村家について	野村紀子……14 - 15
滝沢地区と白虎隊	星野紀子…………16
白虎隊戦闘の地説明版移設	石田明夫…………17
下関支部だより	吉井克也……18 - 19
支部だより	森川・工藤・渡部……20
本部便り	飯沼一元…………21
会員名簿	……………22 - 23
編集後記	飯沼一元…………24

戊辰百五十年をふり返つて

事務局長 飯沼一元

戊辰百五十年の節目を迎えてのイベントは筆者の想像以上のスケールで全国各地で展開された。西日本では維新百五十年と称して、幕末から明治維新にいたる我が国の近代化の担い手となつた若き志士たちにスポットライトを当てた。中でも坂本龍馬はダントツの人気で、西郷隆盛がこれに続いたと言えよう。

一方、東日本では会津の人気が飛びぬけて高く、必ずと言つていいくほど白虎隊が登場した。NHKの大河ドラマは『八重の桜』、『吉田松陰』、『西郷どん』と、会津、長州、薩摩を取り上げたので3者平等に追い風を受けたはずだが、150年後の人気判定は、会津に軍配が上がつたと言えよう。

日本人は判官びいきとされ、弱者が「純真さ」の故に蒙つた悲劇」に対しても同情が寄せられることが多い。白虎隊については「飯盛山から鶴ヶ城を見て、落城と誤認して自刃した」という「少年達の悲劇」がその象徴とされる。

会津藩が降伏し、鶴ヶ城を開城したのは、白虎隊自刃の1か月後です。自刃した白虎隊士の中で唯一生き残った飯沼貞吉は、『白虎隊顛末記』に自刃の理由を「武士の本分を明らかにするためとしつかり書きとめていました。

自刃は武士に許された「意思表示」の儀式です。

筆者は、天皇に至誠を尽くした会津藩が朝敵とされた理不尽に対する抗議を集団自刃という形で表現したものと考えています。これは「ならぬことはならぬ」の会津魂そのものです。

この一年間は、多くの取材メディアに対して白虎隊の「義」を問い合わせました。年が明ける前の2017年12月28日に真っ先に取材に来たのは読売新聞大阪支社の記者でした。

飯盛山唯一の生存者の孫
飯沼一元さん 74



の本分を明らかにするため」と書き残しており、一般に知られる「城が燃えていると誤認した」というのは作り話のようです。貞吉は脇差で喉元を刺し、気絶。しかし偶然、見つけだされ、一命を取り留めました。戦後、貞吉は長州藩士に引き取られて一時、長州で過ごしました。その後、貞吉と改名し、1872年に工部省に入省。電信技師として架線設備の普及に努めました。76歳で亡くなりました。

飯盛山での出来事について多くを語らなかったそうです。死にきれず宿敵になりました。それでも、電信技師として実直にまい進したのは、若くして世を去った仲間のためにという姿勢だったと感じます。

正月早々に『維新の記憶シリーズ』に会津白虎隊を取り上げたいとのことでした。

年が明けて1月16日の夕刊には紙面上半分二分の一ページに会津若松市の夜景写真と共に会津戦争・白虎隊・が掲載されました。

読売新聞は続いて2月16日の宮城版に『戊辰150年仙台藩の群像』と題して、会津白虎隊の生き残り飯沼貞吉を掲載しました。

朝日新聞は3月27日に戊辰150年『白虎隊の儀の心を知つて』と題して、脚本家内館牧子のインタビュー記事を掲載。彼女は山下智久主演の白虎隊テレビドラマを2007年に手がけた

9月に入ると、会津で戊辰150年の行事が次々と開催されました。先陣を切つたのは県立博物館で開催された戊辰戦争150年企画展で、8月が新潟博物館、9月が福島、10月が仙台という3県合同の持ち回り展示でした。

この企画には早くから飯沼家に資料の貸し出しの打診があり、全面的に協力しました。私はからは単なる150年ではなく、いわねなき朝敵の汚名を払拭すべく「義」を貫き通した会津・その象徴としての白虎隊を正しく伝えて欲しい旨の注文を付けました。貞雄が残した白虎隊顛末記・自刃の図、戦闘の図他を貸与し、月後のことをしました。

福島民報が9月4日付けで、戊辰150年会

津若松編④に『白虎隊士眠る祈りの地』を掲載、朝日新聞は10月20日に『白虎隊の道・自刃を迫られた少年達』を産経新聞は12月15日付けの産経抄に白虎隊を取り上げました。

一方、会津若松市の戊辰150周年記念事業は、『義の想い つなげ未来へ。』というキャッチの元に、シアター、講演会、テレビ、藩侯行列など多彩な催事が展開されました。中でも、7月末に開催されたオペラ白虎はとても印象的でした。これは初演から6年ぶりの再演でしたが、殆どのオペラ歌手が自ら再出演を希望されたとのことでした。ストーリーは飯沼貞吉と西郷頼母が対立する死生感を巡って葛藤するという内容です。中でも西郷千重子が子供たちを次々に刺し、自ら絶叫して自刃する場面は強烈です。貞吉役を演じた藤田卓也さんは山口出身の気鋭のテノール歌手というのも因縁めいた演出でした。

一方、テレビで問題になつたのは、BS-TBSで7月14日に放映された『諸説あり、白虎隊の真実』で取り上げられた白虎隊自刃6人説でした。

飯盛山の白虎隊墓碑には19人の白虎隊士が祀つてあり、毎年春と秋の2回、会津弔靈議会主催の慰靈祭が行われています。ところが、会津の歴史研究家（I氏）が、「自刃したのは6人、残りは戦死だった」と証言したのです。全く根

拠のない“異説”でした。この番組は全国放送で、会津での視聴率は低かつたと思われますが、私のところには、知人から「あ～ら、そだつたの？ 飯沼さんの話と違うじゃない」との電話が殺到して大いに困りました。「白虎隊士は大部 分が戦死したのに、これまで150年に亘つて自刃と偽つて喧伝してきたのね。偽証は会津もか？」となると、白虎隊は偽ものになるばかりか、会津の信用は丸つぶれになります。

ゆゆしき事態に陥るのを避けるためには、BS-TBSの再放送をはじめ6人説の拡散を阻止しなければなりません。I氏に撤回文を出してもらい、これをテレビ局に送り、飯沼貞吉の自刃者16人の証言をテレビ局のネット解説に掲載してもらい、終止符を打ちましたが、後味の悪い事件でした。

会津のテレビ局からも取材の要求がきました。福島中央テレビでは、俳優の宮川一朗太氏を招いて『僕が会津を旅する理由』という55分番組を制作・7月14日に放映しました。同氏は1987年に放映されたテレビドラマ『白虎隊』で飯沼貞吉役を演じた会津の人気俳優です。この

ドラマには森繁久弥や里見浩太郎ら蒼々たる俳優が出演し、テーマ音楽には堀内孝雄の『愛しき日々』が採用され、白虎隊を一躍有名にした名作でした。番組では31年ぶりに会津を訪れた宮川さんが、石田明夫さんの案内で鶴ヶ城を訪ね若き日の思い出を語り、会津名物の馬刺し・会津もめんなどを物色したあと、最後に飯盛山の白虎隊碑を参拝するという筋書きでした。飯盛山の白虎隊自刃の地では貞吉の孫飯沼一元とばつたり出会いました。そこで白虎隊士の自刃理由が、「お城が燃えている」ではなく、「武士の本分を明らかにする」だったことを初めて知るでした。

この他、テレビュー福島（TUF）は貞吉をテーマに東京および下関まで取材し、『飯沼貞吉と樺崎頼三の絆』（6月28日）、県立博物館（9月4日）、会津子孫隊出陣（9月25日）の三本立てで放映しました。また、山口CATVは創立25周年記念作品として、『長州と会津怨讐を超えた絆～樺崎頼三と飯沼貞吉～』（41分）を制作し、12月と1月に放映しました。取材は東京・仙台・会津・萩・下関に及び熱の入った作品になりました。

白虎隊の会としての最大イベントは、9月23日に開催された藩侯行列に『会津藩子孫隊』として出陣したことでした。次ページ以降に、特集として子孫隊の生い立ちと解説をはじめ、参加者からの寄稿文を紹介します。この特集には白虎隊の会会員以外の方からも、幅広く寄稿をお願いしました。このような場を通して、これまで直接の付き合いがなかつた方々の交流の場が広がることを期待しています。

会津藩子孫隊について

会津支部長 森川敬寿 会津若松市

会津藩子孫隊は会津藩士小池繁次郎のご子孫木田孝生氏の夢から始まりました。

直系の会津藩士の会を作り、会津まつりに会津藩主を護衛して行列に参加したいと語っていたそうです。

夢が叶い平成10年に初めて行列に参加することになりましたが、木田氏はその2週間前に死去されました。それから5年毎に参加し今回が5回目になります。

平成30年、戊辰150周年を迎える会津若松市の最大のイベントは会津まつりであり、中でも会津藩公行列は県内外から観光客が集まる催しで今回は22万2千人の人出でした。

藩侯行列には550人が参加しましたが、子孫隊は殿さまの護衛役を務める目玉的存在で、観客の注目度もひときわ高いと言えます。今回は会津まつり協会より予算枠一杯の30名の参加が認められました。参加者は北原采女、内藤介右衛門、上田一学、山川大蔵など御家老様のご子孫の方々、会津藩士の子孫で作る斗南会津会の皆様、山本八重の西隣に家があり、江戸昌平黙に学んだ秀才で山川大蔵隊の城への入城の際彼岸獅子を先頭にとの奇策を

献策した水島弁治のご子孫、会津藩公用方で維新後廣澤牧場を作った廣澤安任のご子孫、飯沼貞吉、石田和助、池上新太郎などの白虎隊士の子孫の方々など歴史に名を残された皆様など豪華な顔ぶれでした。

平成30年9月23日天候晴、ちょっと汗ばむ祭り日和でした。

朝7時30分鶴ヶ城公園内にある鶴ヶ城体育館に集合し鎧などの軍装の着付けが始まり、その後鶴ヶ城本丸での出陣式に臨みました。

本丸ステージでは会津若松市長の開会宣言、白虎隊剣舞、会津松平家14代松平保久様もりひさ、ゲストの綾瀬はるかさん、鈴木梨央さんの挨拶があり、午前10時半総勢550名の会津藩公行列の出陣となりました。行列の途中では何か所かで火縄銃や大砲の演武や娘子隊や白虎隊の演舞等が行われ、我々子孫隊も『義に死すとも不義には生きずエイエイオー』と勇ましく鬨ときの声をあげ沿道の観衆から大きな拍手をいただきました。私も旗を担ぎながら参加しました。

途中、1時間ほどの昼食休憩をはさみ無事鶴ヶ城へ帰陣し、15時より帰陣式、その後の



エイエイオーの勝鬨に同調する観客



会津松平家14代当主との集合記念写真の撮影と進みイベントが終了しました。全行程は7キロ強との発表でしたが、鎧等の装束もそれ程思い物ではなく歩くのに負担ではありませんでしたが履いていた草鞋は早い人で2時間

ほどでだめになり交換しながら歩きました。江戸時代には1日2足ほど必要だったようで、会津から江戸まで60里240キロを6～7日で歩いたそうなので12から14足必要だったようです。ちなみに草鞋の値段は土地により多少違いますが大体1足1文、現在の50円前後でしょうか。行列の最中は隣同士で談笑したり沿道の観客と記念写真に応じたり沿道の知人・友人が声を掛けてくださつたりとても楽しい1日を過ごしました。

ところで、子孫隊の企画は2年前から始まります。事務局は井上昌威さんですが、ご高齢のため途中から私が加わりました、前回の隊長は仙台市にお住いの小池繁次郎のご子孫小池純一さんでしたが、体調を壊して辞退されました。

そこで、飯沼一元氏に隊長を依頼すると共に、白虎隊の会に全面的な協力を要請しました。

まずは、参加者の募集です。子孫隊の参加資格は会津藩子孫で、役回り名が必要ですが、150年も経つと高齢化が進み、前回参加者からは辞退者が続出する始末。人脈を辿り、ひ孫・玄孫の若手の開拓に腐心しました。しかし、若い人は一般に関心が薄く、なかなか

OKが得られません。斗南藩や北海道にも手を広げて参加者を確保しました。参加者の最終確認は1か月前としましたが、不思議なことに直前になると参加希望者が出現するのです。

事務局としては会津祭り協会との交渉、前夜式の参加者確定、席順、宿泊の確認。来賓招待など膨大作業が発生するのですが、電子化が進んでおらず、メールが機能する人は半分以下で、手紙でのやり取りを余儀なくされるという悪条件との戦いになります。

行列の前日には市内のホテルニューパレスで会津藩士子孫隊の前夜祭が行われ、子孫隊代表の飯沼一元さんははじめ行列の参加者とそのご家族、行列には参加されませんでしたが激動の京都等で公用人筆頭となり慶應3年に京都で亡くなられた野村左兵衛のご子孫の方や会津史談会会長や応援して下さったお客様など約80名で賑やかに和やかにそしてやはり会津藩士の子孫と言う共通の人達なのでお話を盛り上りました。

この様に大勢の子孫の方がいらつしやる事に驚きましたが、飯沼一元さんの様に会津藩士の孫という方もいらっしゃるとは江戸時代も遠いようで近いなと感じました。

前夜祭に参加されていた歴史研究会白河支部長安司弘子さんが福島民報にインタビューを受け、行列の翌日24日の新聞紙上にコメントが掲載されました。「例年に比べて人が多かつた。賑やかで華やかな会津藩公行列を県内外の人に見てもらえて良かったのではないか」と。

次回の参加は5年後ですが、私も又、皆様と一緒に行列に参加したいと思います。



寄稿1 子孫隊に参加して

千葉県在住 会員 前川佳菜子

昨年9月、戊辰150年の節目となる会津まつり藩公行列の子孫隊に参加した。5年前に続き、2度目の参加である。今回は、陣羽織の武者装束はちょうど二十歳を迎えた甥っ子に委ね、私自身は横を随行する形での参加だったが、5年前にも増して見物の方々の多さに圧倒された。目抜き通りはもちろんのこと、どの辻に入つても、道の両側にたくさんの方々がいらして、大きな声援を送つてくださった。150周年という節目であることはもちろんだと思うが、会津を愛し、心を寄せてくれる方が数多くいらっしゃるのだとうことを改めて実感した。

忠誠とともに、会津藩士としての誇りと志を新たにする象徴的存在だつたに違いない。

忠誠とともに、会津藩士としての誇りと志を新たにする象徴的存在だつたに違いない。



廣澤安任の説明版。会津若松市

子孫隊への参加は、多くの方々と交流を深め、新たな史実を知り、先祖たちに改めて思いを馳せる、得難い貴重な機会であった。

現在の青森県三沢市にある安任が居を構えた場所には、安任が会津から持ち帰ったという八重桜が、100年以上経つた今も、春になると美しい花を咲かせる。

桜といえば、鶴ヶ城は桜の名所でもある。

前回も、そして今回も、同じ斗南藩や会津藩の末裔の方々と共に市内を歩きつつ、私は幾度となく先祖たちのことを考えた。

藩士たちの日常とはどのようなものだったのだろう。きっと、常に死と隣り合わせの厳しい日々だったに違いない。長い遠征から戻った時、真っ先に見つめたのは鶴ヶ城の天守閣だったろう。彼らにとつて、常に変わること

私も幼少期を過ごした当時の家には、イギリス人たちのために建てたという洋館や古いリス人たちのために建てたといふ洋館や古い



遠く会津を離れた安任は、自ら植えた庭の桜に鶴ヶ城の姿を重ね、心の支えとしたのかもしれない。

先祖の名札を胸に付け、慣れない草鞋で立派に歩き切ってくれた甥っ子を見ながら、今度はいつか、皆で桜の季節に訪れてみようと思いつつ、夕暮れの鶴ヶ城を後にした。

※追記

当日は、特別な許可を頂いて主人がカメラマンとして同行し、行列の様子を写真に收めてくれました。

いざれも会津藩士を先祖に持つ総勢30名の、出陣から帰陣までの勇姿。その数500枚を超える写真は、当会の事務局長であり子孫隊の隊長でもいらっしゃる飯沼様にお納めし、フォトアルバムとして公開いたしました。その後、同じく会津藩の末裔で、世話役として同行された歴史研究家の大塚様が、写真をもとにしたDVDを作成してくださっております。

いざれも、戊辰150周年、記念すべき会津まつり藩公行列子孫隊の記録です。

ご覧になりたい方は、白虎隊の会ホームページをクリックしてください。

寄稿2

子孫隊に参加して

— 目黒区在住 会員 東英夫

昨年9月に会津祭藩候行列子孫隊に参加した。会津祭に参加した経験を持つ従兄弟から誘いがあったことが、そもそもものきっかけである。会津祭のことによく調べもせず、不謹慎かも知れぬが、地元の小さなお祭りくらいにしか考えていなかった。

私の祖母である東照子は山川健次郎の二女にあたる。照子の三男である父東博彦は祖父龍太郎・照子宅の隣に家を建てたため、私が子供の頃から照子に身近に接して來た。

照子は明治生まれではあるが、武家の出でることを終生誇りにしていた。幼少時の私を論す時は「侍の子は~~女~~してはなりません」と言つていたことを思い出す。「什の捷」についても話しをしてくれた。もつとも、新年のお年玉については、「あれは下町の商人の風習であり、武士の家ではそういうことはしません」と言われ、幼心にがつかりしたものである。

照子は健次郎を大変尊敬していた。祖父母の寝室の目立つ所に健次郎の書が飾つてあった（「有文事者 必有武備」＝文事有る者 必ず武備有り）。戊辰戦争では大変な苦労をしたこと、時間に厳格であつたのこと、東京池袋にあつた健次郎宅には会津出身の大勢の書生がたこと、書生の学費や生活の面倒を見ていたため暮らしぶりは大変質素であつたこと、などを話してくれた。



<http://byakkotai.club/>

を訪ねたのは今回の会津祭も含めてまだ3回である。特段の理由もないのだが、やはり会津は交通の便がよくないこともある。明治政府が近代化を進めるにあたって、鉄道や道路などの整備を意図的に遅らせ、会津地域に不便を強いてきたことが窺える。

今回の藩候行列には、私の長男伸彦とともに参加した。行列見物には、家内まみはもちろんのこと、私の両親、義姉も来たため、総勢6名での賑やかな会津旅行となり、一層の思い出となつた。

郡山から会津に向かう磐越西線は、明らかに観光客と思われる人もたくさん乗車してい

た。会津祭は意外に大きな祭りなのかも知れない」とようやく気づいた。会津駅には健次郎はじめ会津ゆかりの人物達のポスターが飾られ、お祭り気分を盛り上げていた。参加前に殆ど下調べもして来なかつたが、地元の人と会津祭の話しをすると、見物客も20万人規模で、行列が通る沿道には人が溢れるという話

しを聞き驚いた。

今回、私自身は山川大蔵役を、伸彦は山川健次郎役を務めた。曾祖父にあたる健次郎はともかく、大蔵は少し遠い間柄であり、しかも家老として戊辰戦争で活躍した人物である

だけに、多少の氣後れはあった。

前夜祭では子孫隊参加の方々と交流した。初対面の方々ばかりではあつたが、お互いの先祖が繋がっているためか、親近感を感じ会話を弾んだ。

本番当日、行列参加者は体育館に集合し、

鎧に身を包んだ。京都から、普段は時代劇を担当しているのであろう殺陣の会社の担当者

が大勢配置され、手際よく着替えさせてくれた。鎧衣装など生まれて初めて着たが、予想以上に窮屈ではあつたものの、気も引き締まる思いがした。

行列参加者は、我々子孫隊の他にも沢山いて、山川大蔵役も複数いた。出陣式のセレモニーが続いた後、行進が始まった。大勢の人達の声援を受けることなど経験もなく、年甲斐もなく最初は照れくさい気持ちであったのが正直なところである。ただ、子孫隊ということで、沿道の方から大変温かい声援や拍手を頂き、ほどなく慣れるとともにとても誇らしく行進できた。

山川大蔵、健次郎兄弟が過ごした頃の会津とは、当然のことながら街並みも一変している。しかしながら、遠くに連なる山々の風景は山川兄弟も同じものを見たに違いないといい、何か距離感も縮まつた気がした。照子も喜んでくれたに違いない。

会津出身者として教育界での活躍の場を求めた山川兄弟に思いを致し、今回の行列で何度も声に出した「義には死すとも不義には生きず」という言葉を胸に、会津人の末裔としての誇りをもつてこれからも過ごしていきたい。



途中休憩の体育館で。中央左は筆者、右は伸彦

寄稿3

子孫隊に参加して

— 大阪府在住 会員 水島勝壽

私は会津戦争で日光口参謀を務めた水島純の子孫に当たります。純は山本覚馬、八重邸の西隣に住んでおり、お互に交流がありました。会津戦争の折には、山川浩の指揮のもとに戦かいました。

2018年9月22日（土）早朝、伊丹空

港を出発し福島空港に到着。妻の運転するレンタカーで会津若松市のホテルニューパレスにチェックイン。前夜祭で「山川浩」子孫の東さんご一家と同テーブルになり、鳥羽伏見戦で敗走する山川浩の病を治療せしめた、和歌山県御坊市の旅館「中屋」の女将「おこう」との心温まる美談に花が咲きました。

出席者全員、明日の本番に備え飲み過ぎないで？前夜祭終了。

9月23日（日）5時起床、ホテルからバスで体育館に到着すると、5百人以上の参加者が一斉に着替えを開始し圧倒される！我々子孫隊30名の面々も係り員の方々に手伝つていただき、全体の重さ5キロ程の甲冑、大刀小刀、ワラジを身につける。全員準備完了の合図で540名の大部隊は順次、鶴ヶ城広場へ向かいその芝生に腰を降ろす。周囲は大

観衆で舞台ステージ上には、お殿様、お姫様、腰元衆らが煌びやかに居並び豪華絢爛！

「綾瀬はるか」さんが登場するとムードは最高潮！ 午前10時、号砲数発がとどろき渡り、いざ出陣！ 鶴ヶ城から約6キロメートルの市内パレードがスタートした。殿の馬前に位置する我々子孫隊30名は、隊長の「飯沼一元」さん（白虎隊唯一の生存者の子孫）を先頭に堂々の市中行進！

炎天下で各所の給水ポイントは本当にありがたかった！ 時々、隊列がパツと左右に乱れるのは、路上のホツカホカの馬糞を踏んづけたくない為である。馬上の殿「松平保久」様も長時間では、お尻が痛くてたいへんそなご様子、我々も履き慣れぬワラジでは足も痛くなつてきた。途中、中学校体育館で昼食休憩もあつたが、午後からは疲労もピークとなりつつも、沿道の二重三重の人垣から「おかえりなさい！」

「もう少しだからガンバッテ！」の声援に励まされ歩を進める。ゴールの

和感をおぼえたときは、「大林素子」さんの笑顔に元気づけられて、鶴ヶ城広場にゴールインでき芝生に思わずへたりこむ。

心は少年だが身体は後期高齢者を自覚した！ 帰陣式終了後、松平保久様を中心に記念集合写真を撮ると体育館に戻り、そこで身体を締め付けていた甲冑などから解放され着替える。

大観衆と渋滞に驚きつつ待つていていた妻運転の車に乗り込み、予約していた五色沼のペンションにチェックインして、生ビールをグーと飲みほし達成感の喜びに浸り、今日一日の奮闘の疲れを癒した！ 会津まつり万歳！ 子孫隊万歳！



寄稿4

子孫隊に参加して

埼玉県吉川市在住 会員 松崎寛志

てしまい皆
まとお話
する時間
もありませ
んでした。

大変思し訳

なく思つております。



勇姿「上田一学」

初めまして、私は「会津藩士・上田一学」として子孫隊に参加させていただきました松崎と申します。「上田一学」の名前はあまり知られていませんが、家老・上田学太輔が改名する前の名前です。私の系譜は上田一学（八百石番頭）の二男・勝四郎になりますが、木村家の養子となりましたので木村勝四郎を名乗っています。その木村勝四郎は京都で戦死しましたが、残された妻子は会津戦争時に籠城し、開城後に塩川へ逃げ延びました。その時に子供に背負わせてきたと言う（勝四郎の妻が書き残す）刀の鍔には上田家の家紋（洲浜）が刻まれています。

今回子孫隊に参加できましたのは昨年一月に飯沼様から子孫隊のお話しがありました。実は私が子孫隊を知りましたのは5年前の会津まつりになります。5年毎に藩公行列の子孫隊参加と知りましたときは半分諦めていました。それゆえ飯沼様からのお誘いを大変感謝しております。上田学太輔の長男・上田新八郎は奇勝隊の隊長で、白虎隊と共に戸の口原で戦いました。私も白虎隊との縁を感じています。

さて子孫隊の前夜祭の交流会に戻りますが、実のところその夜は「会津磐梯山踊り」で仮装にも参加していましたので交流会を途中退席し

子孫隊の皆様とお話できましたのは藩公行列当日に着付けする体育館でした。体育館の中には既に衣装が隊列ごとに並べられ、それを見たときに緊張感も増し、興奮が收まりませんでした。その様な中、子孫隊の皆様とお話しすることで徐々に緊張も和らいできました。袴・着物や甲冑を身に着けると私も先祖の「上田一学」に成り切ったものです。写真のように…。

（笑）

ところで私は以前より山川家ご子孫の方々にお会いしたいと思っていました。先祖の上田学太輔の母親は梶原平馬（景保）の娘です。兄？梶原健之助（景範）の養子になりました梶原平馬（景武）氏の妻は山川二葉さんです。ただ残念なことに二葉さんとは離別しましたが、数年でも上田学太輔の従兄姉になるようですが（とも勝手に思っています）。その山川家の山川大蔵氏、山川健次郎氏に思いもかけずお会いできま

したこと、大変光栄に思っております。

さて着付けが終わり体育館から外へ出ると「雲一つない青空」に恵まれました。太陽の光も眩しく汗ばむ暑さでしたが、市内を歩き始める

と周囲の観客に圧倒され暑さも忘れるほどです。隊列は私が中央、右側に芦澤直太郎氏、左側に三澤栄一氏、後ろに山川健次郎氏がいて沿道の人たちに手を振つたり、握手したりと、お喋りも楽しい隊士たちに囲まれ笑いも絶えませんでした。特に（若い）山川健次郎氏は沿道の女性たちに声を掛けられ凄い人気でした。このときばかり「若いのはいいなあ」と羨ましく思つた次第です。実は私も声を掛けられました。行列が神明通りや七日町通りに入いると、「松崎さん」との声、この付近には中学の同級生たちが住んでいるので事前に連絡していた友人たちが会うのです。（笑）

藩公行列も終盤になり、子孫隊の皆さんも疲れが出てきたころ、皆さんが声を掛け合つて最後まで力を注いでいるのが分かりました。私も足が疲れ響りそうになりましたが、無事にお城に戻り、やり遂げた気持ちでいっぱいでした。

私は子孫隊参加で会津藩士の子孫の方々にお会いできましたこと大変感謝しております。そして子孫隊のお世話係でした大塚様（ご姉妹）にも大変お世話になりました。機会がありまし

寄稿5

会津藩士の義を未来につなげ、子孫隊

千代田区在住 特別会員 芦澤直太郎

榮えある会津藩士子孫隊に初めて参加させ

名札を胸に掲げて参加しました。

て頂き、百五十年前に先祖が命を懸けて守ろうとした鶴ヶ城にて、当時さながらの勇姿を再現して参りました。

もともと芦澤家は会津藩祖保科正之

いよいよ当日、人生初の甲冑を身に付け、澄み渡る青空のもとでの出陣式、白壁の天守閣を見上げると、自然と背筋が伸びます。

公の家来で、武田信玄の死後、信濃高遠藩、出羽山形藩、そして会津藩へと移封された主君に幕末まで仕えた、知行百五十石の譜代でありました。

江戸後期に後継の男子が不在となり、

飯沼久米四郎（1805年生まれ、後

お城に帰陣する頃には足を引きずつ

弟に当たる）を養子として迎えました。

久米四郎は名を蘆澤寛治直保（あしざわかんじなおやす）と改め、藩主容保

公の京都守護職ご在任中は2度上京し

て蛤御門や伏見の戦いにも加わりまし

た。戊辰戦争の時はすでに満63歳の老体でした。

さらに嬉しかったのは、私のルーツ

に当たる飯沼家をはじめ、同士の子孫

の皆様と行列参加を通じてお目に掛か

り、交流が再開できることです。



戊辰では多くの会津藩士が無念を味わい離散しましたが、その後百五十年

の時を懸命に生きてきた子孫の私たち

が、5年ごとに会津若松の地で藩公行列とい

う形で集えることは、先祖に対する供養であ

ると同時に、未来への希望でもあります。この行事が長く続き、会津藩士の思いが伝承さ

れることを祈念してやみません。

大通りに出ると、驚くほどの人垣が出来ています。私は役柄にふさわしく、にこにこ笑

うことは控えましたが、せつかく声を掛けて下さった方々に対しても微笑んで手振り返し

たり、子供には握手したりして応え続けまし

た。お互いに見ず知らずですが、通りすがりの一瞬でも笑みを交わすことで、会津の誇りと再興への思いが通じ合つたと実感します。

思えば5年前の子孫隊に参加された飯沼一

元代表を初めて沿道から応援して以来、私は毎年のように会津まつりを観覧しながら、いずれ自分が参加する姿をイメージしており、

ようやくその念願が叶いました。

企画運営にご尽力頂いた皆様に感謝申し上げます。

さらに嬉しかったのは、私のルーツに当たる飯沼家をはじめ、同士の子孫の皆様と行列参加を通じてお目に掛かり、交流が再開できることです。

飯沼家の出自である、この芦澤寛治直保の玄孫（孫の孫）が私であり、子孫隊ではその

寄稿6

白河戊辰百五十周年記念事業

会員 安司弘子

慶応四年閏四月末。

鳥羽伏見に始まる歴戦で鍛えられ、火力と戦法に優れた新政府軍が奥羽の咽喉・白河に侵攻しました。防衛勢は未熟な同盟で繋がれただばかりの混成兵团・奥羽同盟軍です。

白河は当時、最後の藩主となる阿部家が棚倉に移封され、新しい城主が入封しないまま戊辰戦争の戦場となりました。

所謂「城を枕に討ち死に」する地元軍がない状況のなか、奥羽の要衝白河を巡っての攻防戦は実に百日も続いたのです。

白河戦争は、「白河『口』の戦い」と呼称され、会津戦争の中に包含された歴史観のまま現在に至ります。

白河市では、戊辰戦争の中で最も長い戦場であり、激戦地だった白河戦争を広く知つてもらいたいと、「白河戊辰百五十周年記念事業」実行委員会を立ち上げ啓蒙に努めてきました。

その取り組みについて披露させて頂きます。

実行委員会には、「式典・慰靈祭部会」「歴史部会」「教育部会」「文化・観光部会」の専門部会が置かれ、各専門部会会議と全体会議

により事業計画が進められました。

私が属した歴史部会では、まず事業全体を貫くキヤツチフレーズを検討。

白河は東西の別なく百五十年間香華を手向けてきた背景があり、「仁」がその心根に相応しい言葉だと意見が一致しフレーズを募りました。

「よみがえれ「仁」のこころ」を提示した私の案が採用され、「甦る「仁」のこころ」に改められて全ての事業が展開されました。

昨年七月十四日。事業の核と位置づけた「合同慰靈祭」が白河文化交流館コミニネスにて挙行されました。

クロージングセレモニーは、ピアノと篠笛演奏をBGMに、女優の紺野美沙子さんが『慰靈の詩』ひともと桜より白河戊辰戦死者の御靈へ』(阿部正栄作詞)を朗読し、厳かな儀式は幕を閉じました。

白虎隊の会からは、副会長の木下健さんをはじめ下関支部長の吉井克也さん、長崎支部長の工藤新一さん、研究担当役員の石田明夫さんなどが、それぞれ多くの会員とともにご参加下さいました。

この日おこなわれたレセプションでは、戊辰戦争中に民衆と共に踊つたとされ、長州・大垣などに伝わる「白河踊り」で交歓するなど大いに盛り上がり、和気藹々の交流が繰り広げられました。

翌十五日には、歴史家の加来耕三さんが

二十六の県から知事や市町村長、関係各藩の当主などが白河市からの招待を受けて全国各地から参列。市民や歴史愛好家をふくめ約千人が戊辰戦死者の御靈を弔いました。

式では阿部家第二十二代当主・阿部正靖さんが祭文を奉読。



「明治維新まさかの深層」、NHKアナウンサーの渡邊あゆみさんが「戊辰百五十年に想う」

の演題で講演。シンポジウムでは、パネリストに加来さん・脚本家の山本むつみさん・鈴木和夫白河市長が登壇し、渡邊あゆみさんの進行で「明治維新と戊辰戦争」を語りました。



実施。

元NHKアナウンサーの松平定知さんと、

『落城』の著者穂積忠さんの講演会も開催しています。

さらに、白河戦争を子どもたちに分かりやすく伝えるためのマンガ本を作成し、幕末の歴史を学習する小学六年生・中学二年生および教師に配布。

記念誌『戊辰白河戦争』(歴史春秋出版)も刊行し、翌年の合同慰靈祭参加者への記念品とするなどその活動は多岐に亘りました。

三十年度は、ロゴマークとなつた陣羽織を作り、合同慰靈祭を始め多くのイベントで活用。特別企画展を長期間開催し、「まだまだ知られていない戊辰戦争」の講話会も継続。

遡つて。平成二十九年度はロゴマークを作り、フラッグやのぼり旗・ピンバッヂを作成。市内循環バスをラッピングし、新白河駅構内にはPR版を設置、CGを用いて白河戦争を解説する映像を、小峰城集古苑などの市施設と同様に常設しました。

また、〈戊辰戦争に学ぶ、地域の心、掘り起こし〉を目的として、「親子戊辰戦争ツアー」、「戊辰戦争歴史探索ツアー」、「戊辰戦争チラシ・パンフレット作成」、三十年度にかけての連続ミニ講話会「カフェで歴史を学ぶ夜」を

るオリジナルの楽劇「影向のボレロ」の上演が事業のフィナーレを飾りました。

両軍の血を分けた先祖を持つ母子が、現代の白河から百五十年前にタイムスリップ。時代の証言者として戦乱の様子をつぶさに見つめる音楽劇です。

世界的和太鼓奏者林英哲氏による渾身の序奏、生オーケストラ・劇と踊り・合唱・バレエなどで構成されたこの楽劇の主題は、戊辰戦争の中で浮かび上がる「仁」の心。

白河の地域で広く伝えられる戊辰戦争の弔い方を取り上げ、「死者は敵味方なく神仏となるのでは……」といった古来の日本の精神について、素朴な民衆の行為を地方弁でリアルに展開しました。

二年間にわたって取り組んできたテーマは最終章で体現されました。



白虎隊士野村駒四朗と会津藩野村家について

中野区在住 特別会員 野村紀子

二〇一八年九月二十四日、飯盛山で行なわれた墓前祭に初めて参加をしました。白虎隊十九士の墓の前に、会津藩、及び会津若松市の振興に関わりのある方々が多数参列され、一般の方々も交えた旧会津藩士戊辰戦役殉難者を慰霊する式典で、大変厳かに執り行われており、驚いたと言うのが正直な感想です。

白虎隊十九士の一人である野村駒四郎は縁戚に当たりますが、毎年春秋でこのように慰霊頂いていたことを大変嬉しく思います。

野村家先祖は野村但馬織部定光が蒲生氏郷公の転封に伴って近江から会津の地に参り、保科公の転封で召し抱えられて以降、歴代藩主に仕えてきました。

織部定光には四人の息子があり、嫡男與惣右衛門盛時の系列が駒四郎、四男所左衛門直重の系列が私の家系になります。

今まで両親から聞いていましたのは、

「蒲生氏郷公の家臣で近江から会津へ」、「白虎隊士で飯盛山で自刃した野村駒四郎は親戚」、「直系で幕末に京都で筆頭公用人として活動した野村左兵衛直臣は京都会津墓地にお

墓がある」、「左兵衛に子供がいざ弟が継いだ」、「戊辰戦争後は大層苦労して東京に出てきた」程度でした。

そして、祖父が東京に出て来て以降、父も私も東京で生まれ育っていますが、戸籍は会津から移さず、お墓も善龍寺にあります。祖父の代には様々な史料が有つたようですが、戦争で疎開している間に逸失（祖母が勝海舟か

らの手紙も有つたと言つていたそうです）、会津を墓参りで訪れるのは数年に一回、親戚も分からなくなっていましたので、系図整理は難しいのではないかと思つていました。

一、野村左兵衛没後に、家督を継いだ弟左馬之丞（曾々祖父）が六月十二日白河で戦死してましたこと、

二、その長男直（曾祖父）の義父に当たる野村悌之助も、九月三日関山の戦いで戦死と、曾々祖父が二人とも戦死してましたこと、

三、日向家から嫁いで左馬之丞の妻となつたシウ（曾々祖母）の兄日向左衛門（娘は日向ユキ）も戦死、

四、縁戚の野村駒四郎も自刃

と、調べるほど巻き込まれた藩士と家族が多くいることが分かり、戊辰戦争の悲惨さを改めて実感しました。

六月十二日に亡くなつた左馬之丞には六人



八代野村佐兵衛直臣の墓
京都黒谷金戒光明寺会津墓地

きっかけは、郷土史家の古川富弘様から頂いた芳賀幸雄氏編著「会津藩諸士系譜」の野村家史料によつて、初代からの系図が分かつたこと、これに市役所から取り寄せた明治初期からの戸籍を合体させて、ネット検索を加えて、エピソードや縁戚を追いました。そこで蒲生家家臣であった織部定光とその息子たちが保科公に出仕し、野村駒四郎家と私の方の野村家との関係も判明した次第です。

そして、「幕末会津藩殉難者人名録」を検索した際に、

一、野村左兵衛没後に、家督を継いだ弟左馬之丞（曾々祖父）が六月十二日白河で戦死してましたこと、

二、その長男直（曾祖父）の義父に当たる野村悌之助も、九月三日関山の戦いで戦死と、曾々祖父が二人とも戦死してましたこと、

三、日向家から嫁いで左馬之丞の妻となつたシウ（曾々祖母）の兄日向左衛門（娘は日向ユキ）も戦死、

の息子と二人の娘がおりました。

長男直は当時十九歳、次男唯三郎十六歳でした。直は白河戦で、唯三郎は越後警護で、各々怪我をしたため、会津攻撃の際に籠城戦に加われず、知行を転々としたことも判明しました。次男は白虎隊の年齢ですが、白虎隊結成時は、越後警備を全うしたいとして加わらず、結果怪我をしてしまった為に白虎隊に参加できなくなり、共に学んだ仲間が戸の口の戦いや飯盛山で戦死・自刃したことを悔やみ続けたと本人の手記にありました（野村唯三郎遺稿集「断雲血涙録」）

六番目の息子は八月六日に誕生、八月二十一日が会津攻撃です。夫を亡くし、頼りとなる長男次男と別れて、妻シウは幼子たちを抱えてどんなに大変だったかと思いを馳せました。

また、京都会津墓地に「野村清八盛重 没年慶応元年十二月八日」という墓があり、駒四郎の父は清八と言われていることから、当人だとすると、駒四郎一家も家長を失い、大変な思いをしていたことが伺えます。

会津戦争後の野村家は、斗南藩大畠村に移り、相当な苦労をしますが、藩廃止後の明治六年に一家で会津に戻り、長男直はその後若



野村清八盛重の墓
京都黒谷金戒光明寺会津墓地

があります。古いお墓も多く在って、調べてみると、六代目以降からでした。そして最近、初代から五代目はお寺の本堂の裏手「なよたけの碑」近くにあることが、古川富弘様の調べでわかりました。

このように戊辰百五十年は野村家の先祖の様々なことが判明した記念すべき年になつたわけですが、動乱期に、義を以つて必死で生きた先人たちに思いを馳せながら、引き続き調べていきたいと思っています。

写真「初代野村所左衛門直重の墓」 善龍寺
古川富弘様撮影



参考文献

芳賀幸雄氏編著「会津藩諸士系譜」

幕末会津藩殉難者人名録

野村唯三郎遺稿集「断雲血涙録」

旧制会津中学同窓会名簿（昭和八年）

寄稿8

キヤノンギヤラリー銀座

齋藤ジン写真展「葉脈」ギヤラリートーク

／滝沢地区と白虎隊／ 足立区在住 会員 星野紀子

2018年11月24日、会津出身の写真家齋藤ジン氏の写真展にて講演しました。齋藤氏が故郷を独自の視点で切り撮った写真の撮影秘話を、私が被写体の歴史背景や逸話をお話し、会津の歴史、息づく先人たちの思いと、脈々と続く人々の鼓動を紹介する新しい試みです。

『旧滝沢本陣殿様の間』の写真（以下『』）が展示写真）は、張り詰めた空気感を伝えます。滝沢組郷頭横山家は、参勤交代や領内巡視の藩主休息所。滝沢峠に続く旧白河街道に面し戊辰戦争最前線となり容保公らが滞陣。藩主護衛の白虎隊士中二番隊三十七名が出陣の命を受けた場所で、銃弾が貫通した襖や柱の刀傷が今も生々しく残る様は戦争の事実を伝える大切な遺構です。

白虎隊寄合一、二番隊は既に越後戦争に出陣しており、土中隊の「早く殿様のお役に立ちたい」との思いを想像します。歴史を捉える時、先人たちはどうのような思いでその場所に立ち、どう行動をしたのかを想像することが大切だと考えます。写真から先人の息遣いを感じて頂くことにトーケの重点を置きました。

『石畳が残る滝沢峠の道』を会津藩士が行きかい、『戸の口原戦場付近の旧道』は白虎隊が露営した雰囲気を今に伝えます。

『母成峠戦死者埋葬地の土饅頭』は墓標がなく草木に覆われ所在不明でしたが、昭和53年に発見。毎年慰靈祭が行われています。『越冬の白鳥が集まる冬の猪苗代湖畔』、『雪の金堀地区』、『満開の時に大雪が降り積もった樹齢六百年の石部桜』は会津の厳しい冬を伝えます。

士中二番隊が山中をさまよい退却する際、『シダが生い茂り湿気をまとつた不動明王像』がある滝沢不動滝付近の街道に出た時、永瀬雄治が股を撃たれました。蘇生した飯沼貞吉の遺した手記は現場にいた人物だからこそ知る事実です。隊士たちは『飯盛山の洞穴』をくぐり山の中腹へ。洞穴を歩く行事の体験談を紹介。長靴にレインコートで堰き止めた水路内へ。横に平行して見える、当時隊士たちが通った狭い水路は、腰を屈める程の難儀な空間でした。

『妙國寺の御住職』同寺は自刃した白虎隊の仮埋葬地であり、降伏の際容保公・喜徳公が謹慎。寺の周囲にかがり火が焚かれ厳重に包囲された

状況をお話。

『滝沢峠で戦死した遺体を金堀村民が集め埋葬した拾八人墓』は、明治二年に書かれた墓所絵図を紹介。現在も地元の方により手厚く弔われています。

写真展のテーマ「葉脈」を表した『飯沼貞吉が隠れていた清流寺不動堂そばにある御神木』。訪れた夏、道の崖面で子熊に遭遇しました。夏でも気温の低い山深い所で、冬に貞吉が痛みに堪えて隠れていた情景が思い浮かびます。

参加者から「写真と歴史背景の説明は興味深かつた。」との声を頂きました。銀座の地で、会津を感じて頂ける機会のお手伝いが出来たことを嬉しく思います。



白虎隊戦闘の地説明版移設

研究担当役員 石田明夫

卷之三

平成二十六年(2014)九月二十二日 虎隊が戦つた会津若松市河東町八田の戸ノ口原の丘陵に「白虎隊戦闘の地」として、看板が設置されました。看板は、

二本松裏街道沿いの強清水の清水脇。
一か所目は、会津若松から猪苗代へ通じる
二か所目は、上強清水集落東の新四郎堀脇
で、白虎隊が戦つたとされた場所。

三か所目は、一八六八年八月二十二日夕方
四時頃、容保公の命によつて出陣した白虎隊
が戸ノ口原で最初に陣を張つた「菰土山（こ
もつちやま）」。

四か所目は、奮戦の地の石碑がある場所。飯沼家所蔵の戸ノ口原で戦った唯一の図である「白虎隊奮戦の図」が掲載されていることから、見学者にも大変役立っています。

一八六八年八月二十二日の『若松記』に、
「日向内記、兵引率シテ申刻ノ（午後四時）
大野原ニ出張、丘陵ニオイテ要害（ざんごう）

1

とあり、白虎隊は、戸ノ口原で到着すべに
塹壕を構築したようで、それが菰土山であり
山城のように丘陵を段々に削平したことから「要
害（ようがい）」と記載されています。

白虎隊は、二十二日、前日単獨行動の許可

二伊藤俊彦ハ見エズ、戦友一同心痛シ居ル所
ヘ棧俵（さんだわら）ヲ被リ来レリ、其氣ノ

街道南側にある新四郎堀に身を南側から、速射したのです。

二本松裏街道を進んで来る西軍に対し、南の新四郎堀と、北の姥山からと挟み撃ちにし

卷之三

平成二十九年十一月二十九日 二が所町に
建てられていた「白虎隊戦闘の図」の看板を

白虎隊が戦った軍闘の地近くの媒山陣地跡入り口へ移設しました。軍闘の図と地形を合わせて見ると当時の戦いのようすが伺えます。



姥山軒塙跡に移設された看板

下関支部報告

支部長 吉井克也

明治百五十年（戊辰百五十年）という歴史の節目の年度が終わろうとしています。下関支部としては、格別目新しい取り組みはしませんでしたが、マスコミの取材対応などで、中々に多忙な一年になりました。

一 会津松平家ご当主の御来県

支部最大の出来事は、松平家一四代当主松平保久様ご一行が去る三月四日、美祢市小杉の恩愛の碑にお立ち寄りくださったことです。

萩・山口訪問の多忙な日程の中、碑前に佇まれ黙祷される松平様のお姿に接し、白虎隊士飯沼貞吉に対する限りない哀惜の情と長州藩士樺崎頼三への深い感謝の念が、私どもにもひしひしと伝わってまいりました。この上お花まで手向けて頂き、碑の建立に携わった者にとって、これに勝る喜びはありません。これを機に、私たちも改めて恩愛の碑建立の意義を噛みしめることができました。

松平様ご一行をお送りし、十日過ぎた頃恩愛の碑に立ち寄りました。すると、記念樹の会津身知らず柿のネットに、日本手拭いが結び付けてありました。解いて見ると、歴代會津藩公家紋が染めてありました。ご一行のどなたかが思いを込めて結ばれたに違ひあり



ません。手拭いを広げた瞬間、会津地方の各時代を支えてこられたすべての御靈が、「貞吉よ。よく頑張つたな」「頼三さんありがとう」と二人を讃えているようで、万感胸に迫るものがありました。

松平様、ご一行の皆様、ありがとうございました。

二 白河戊辰一五〇年記念事業「甦る仁のことろ」合同慰靈祭に参加して

去る七月一四日～一五日、下関支部から藤田顧問、支部長夫妻、事務局長夫妻の五名が参列をしました。全国の東西両軍ゆかりの地から千名を超える方が参集され、白河文化交流館で盛大かつ厳粛に慰靈祭が行われました。神道と仏教の二通りの慰靈方式をとる行き届いた配慮と、かつて激しく戦った東西両軍出身地の方々が、同じ壇上に上がって献花を手向けられる姿を拝し、全身が震えてくるような感動を抑えることができませんでした。

夜は、白河の東京第一ホテルで歓迎レセプションが行われ、ここでも白河の皆様方から温かなもてなしを頂きました。下関支部の藤田顧問から白河踊りのリクエストがあり、急ぎよ会場では、白河市、萩市、山口市などの白河踊り保存会の皆様方による盆踊りが始まりました。まさに友好の輪が生まれ、会場は大いに盛り上りました。

西軍墓地のある長寿院では、坊守さまから、位牌堂のご案内を頂き、また、墓地にもお参りをしましたが、当地に眠っている三十名の長州兵の御靈は、懇ろに供養されています。また、稻荷山の「戊辰戦争白川口の戦い戦死者慰靈碑」には、東西両軍の戦死者名が分け

隔てなく刻銘され慰靈されています。まさに白河は、「仁」の地であることを実感いたしました。人見実行委員長様、安司様、実行委員会の皆様、歴史に残る合同慰靈祭を開催して頂き、ありがとうございました。



東行庵（高杉晋作菩提寺）と美祢市の恩愛の碑にご案内をし、二年前の除幕式の思い出にひたりました。

四 主な出来事

- ①四月六・七日 テレビュー福島の取材があり、長州の中の会津を紹介する。開局三周年記念「マツコの修学旅行」で放映。「NST福島」で「下関に眠る会津藩士神戸岩蔵」他日「飯沼貞吉と樋崎頼三の絆」を放映
- ②四月一二日 龜山夜話会で講話「長州の中の会津」
- ③六月三日 神戸岩蔵墓及び恩愛の碑清掃活動（一二名参加 YABの取材）
- ④六月一一日 テレコム取材 BSTBS 「諸説あり」で放映。
- ⑤六月二三日 恩愛の碑建立委員会の開催
- ⑥七月一四・一五日 白河戊辰戦争百五十周年記念事業「甦る仁のこころ」合同慰靈祭に参加 NHK（山口）取材、放送。読売新聞（福島）の取材 「特集（戊辰一五〇年）第一部 縁をつなぐ②」に掲載
- ⑦八月二日 神戸岩蔵墓参・研修会「白河合同慰靈祭報告」
- ⑧八月五日 恩愛の碑清掃
- ⑨八月二三日 山口ケーブルテレビ取材①
- ⑩九月四日 山口ケーブルテレビ取材②
- ⑪一〇月一一日 山口シティ講座講演（長州の中の会津）
- ⑫一月一一日 山口新聞リレーエッセー「相互理解。長州人の使命」
- ⑬一月三〇～一二月一日 石田明夫先生ご一行様ご来関。山口ケーブルテレビ取材③「長州と會津 恩讐を超えた絆～樋崎頼三と飯沼貞吉～」放映
- ⑭同日 朝日新聞取材 特集 長州発維新一五〇年「白虎隊の史跡巡り交流」掲載
- ⑮二月一六日 白虎隊の会下関支部総会



元号の変わった新年度は、会津の「義」「白河の「仁」長州の「信」の心に学びながら新たな気持ちで支部活動に取り組みます。

白虎隊一九士の靈石が安置されている長府万骨塔にご案内し、夜は下関の東京第一ホテルで交流会を行いました。総勢一六名の参加を得て、交流の輪が一層広がりました。翌日は、

会津支部だより

会津支部長 森川敬寿



会津とらぞう「白虎隊の会会津支部」2012年7月

2018年11月から長く会津支部長を努められた眞部正美氏に代わって、会津支部長を仰せつかりました。白虎隊の会発足の時から、会津支部の活動拠点となっていた飯盛山山道入口の「会津とらぞう」が閉店となり、『白虎隊の会会津支部』の看板は森川宅に移設しました。飯盛山参拝の一等地を失ったことは大きな痛手ですが、白虎隊の会会津支部の情報拠点役は、継承していくので、よろしくお願い致します。な

お、連絡先は090-3750-2234、電子メールはjyu0124@yahoo.co.jpとなります。

長崎支部だより

長崎支部長 工藤新一



白河での歓談、高久左から吉井、木下、高久、橋本京都西雲院住職

2018年7月14から15日にかけて、白河で開催された一甦る仁のこころー白河戊辰150周年記念事業に、支部メンバー6人で参加しました。2016年8月に長崎歴史博物館館長を長く勤められた大堀哲氏が逝去され、支部のとしては大きな打撃となりましたが、長崎総合科学大学学長として赴任された木下健白虎隊の会副会長を迎えるなど頑張っています。白河では安司弘子さんに大変お世話になり、下関支部の吉井克也さんとも再会でき楽しいひと時を過ごしました。



白河の後にして、会津に入り石田明夫さんの案内で長崎支部メンバの懇親会 右端は筆者

東京支部だより

東京支部 渡部麗

2019年の1月に会津松平14代の殿様をレキシブルにお招きし、「会津人TERAKOYA」を開催しました。廃藩置県後も斗南に残り、日本酪農の父となつた広沢安任をメインに会津人の実像を抽出するコンセプトでプレゼン、好評を得ました。

会津松平家も15代の若殿がご成人され、これから新しい会津の歴史が創られていきます。元号も変わり、新時代の幕開けに備え積極的な会津の仕掛けを模索できたらと思っています。私的にも重厚な会津の歴史を外国の方にもわかりやすく魅力的にプレゼンできる技術を身に付けていたいと思い、いま英会話に通っています。来年の東京オリンピックを見据え、レキシブルの活動もギアを上げていきます。2019年も引き続き、よろしくお願ひ致します。

本部だより

1.会員

2018年度の新入会員は9名（昨年比+6）でした。会員名簿管理上、会費2年未納者は休会、3年以上は退会とし、物故者と共に名簿から削除しました。その結果、2019年3月末現在、名簿登録会員数は124名（-5名）となりました。内訳は特別会員29（+2）、一般93（-7）、賛助2（0）。地域別内訳は会津28（-4）、東京39（+4）、下関16（-1）、京都9（-1）、長崎4（-3）、その他28（0）名となりました。

2.活動

主な活動実績は表に示すとおりです。黄色は、本文に記事が紹介されています。

年月日	主な活動（予告を含む）
2019年4月30日（予）	会報第9号発行
2019年4月24日（予）	春の飯盛山墓前祭参加（会津支部・森川敬寿）
2019年4月16日（予）	年次総会（インターネットで）
2018年12月1日	白虎隊の会会津支部長交代（真部正美氏から森川敬寿氏へ）
2018年11月29日	白虎隊戦闘の地説明版修正と移設
	星絵里子氏紙芝居公演
2018年11月24日	星野紀子氏齋藤ジン写真展「葉脈」ギャラリートーク
2018年9月24日	秋の飯盛山墓前祭参加（飯沼一元、司太夫、野村紀子、芦澤直太郎）
2018年9月23日	戊辰150年会津藩侯行列に子孫隊として出陣（会津若松市）
2018年9月22日	子孫隊前夜幕に白虎隊の会合流参加（会津若松市）
2018年7月～12月	戊辰戦争150年展示会（長岡、会津、仙台）への飯沼家から展示品5点提供
2018年7月28日	オペラ白虎（第二回）参加（会津風雅堂）
2018年7月14・15日	戊辰150年白河慰靈祭（安司弘子、木下健、吉井克也、工藤新一）
2018年6月29日	テレビ福島（TUF）取材（飯沼一元）
2018年6月14日	BS-TBS 諸説あり～白虎隊の真実～取材（飯沼一元）
2018年6月6日	宮川一朗太会津口ヶ取材（飯沼一元・会津飯盛山）
2018年4月24日	会津史談会第92号戊辰150年記念論文として「会津と長州」掲載
2018年4月24日	春の飯盛山墓前祭参加（会津支部・森川敬寿）
2018年4月16日	会報第8号発行
2018年4月2日	年次総会（インターネットで）

3.決算報告

白虎隊の会	貸借対照表		単位（円）		損益計算書		単位（円）
資産の部		負債の部		収入の部		支出の部	
現金及び預金	1,013,424	未払金	0	会費	2630,000	HP構築外注費	101,100
未収入金	0	負債の部合計	0	寄付	157,000	会誌発行	33,873
		前期繰越残高	710,794	書籍代	196,299	広告販促費	40,000
		本期損益金	302,630	会報名刺	2,200	説明版移設	139,320
		次期繰越残高	1,013,424	助成金	0	支払手数料	1,576
資産の部合計	1,013,424	負債純資産合計	1,013,424			本期損益金	302,630
会計監査	平成31年3月31日現在			合計	618,499		618,499

会計監査

平成30年度の決算報告書及び預貯金記録を照合精査した結果、いずれも誤りなく執行されていることを認めましたので、ここに報告いたします。

平成31年3月31日 会計監査役 緑川 正和 印

4.2019年度の計画

新規会員獲得目標5名、総事業費は50万円を予定。

1. 会津人群像2019年7月号に「会津白虎隊の全貌」を寄稿
2. 塩川本陣跡に説明版設置
3. その他未定

白虎隊の会 設立趣意書

会津白虎隊は1868年（慶応4年）3月1日に会津藩の最年少軍隊として組織され、戊辰戦争で皇国への義を掲げて、新政府軍と戦いました。

数え年16～17歳で編成された白虎隊は総勢約300名で、うち約30名が戦死し、16名が飯盛山で自刃しました。

彼らはこの戦いで「会津の教え」を健気にも最後まで守り通しました。

「会津の教え」とは『ならぬことはならぬ』に象徴される生活の掟でした。

いつ、いかなる場面でも『義』をもって生きることが彼らの行動規範でした。

生き残った白虎隊士の多くは、国賊の汚名を着せられ、流罪となり、死んでいった戦友たちへの忸怩たる思いを抱きながら、艱難辛苦に耐えました。

一方、会津白虎隊の壮烈果敢な行動は「皇國への犠牲」としてモデル化され、戦争に利用されました。

あれから144年、会津白虎隊士の子孫は4代目から5代目を迎え、情報は散逸し、史実は風化しつつあります。

しかし、白虎隊物語は、日本人の心の中に生かし続ける必要があるのではないかと思うか？

私たちは白虎隊の『義』を現代および将来に伝え、広めることを目的として、【白虎隊の会】を設立しました。

この会は、1.調査・研究、2.交流、3.事業企画 の3つを中心に会員自らの活動を原動力として推進いたします。本会の運営は会則に示すとおりです。入会資格は問いませんので、趣旨に賛同いただける方の入会を切にお待ちいたします。

2010年4月1日

【白虎隊の会】設立発起人一同
文責 発起人代表 飯沼一元

《編集後記》

昨年は戊辰150年を迎えて全国的に大いに盛り上りました。明治維新の立役者となった「西」と敗者となった「東」は対照的でした。中でも会津白虎隊は「悲劇の象徴」として、盛んに取り上げられました。

しかし、「なぜ悲劇なのか？」は正しく理解されていません。「鶴ヶ城が落城したと錯覚して死んだ」という落城誤認説は観光客向けには分かりやすく、100年以上に亘り通説とされてきましたが、「武士の本分を明らかにするため」の自刃だったことが唯一の生存者飯沼貞吉の証言で判明しました。

戊辰戦争で散った白虎隊士に学ぶものがあると信じ、白虎隊の会を立ち上げて9年。貞吉証言を大切にし、「義」に生きた白虎隊士を現代の若者に伝えたい。

会誌第9号を皆さんとの協力により、発行することができました。継続は力なりと自分を戒めながら、老骨に鞭を打っています。

2019年3月 飯沼記

♪白虎隊の会について♪

★入会は自由です。入会金は無料・年会費は三千円です。

5年分一括納入へのご協力をお願いしています。

郵便振込先加入者名：白虎隊の会 口座記号番号00100-1-616556

【白虎隊の会】事務局

〒156-0054 東京都世田谷区桜丘2-24-14 TEL:03-3429-6652 FAX:03-3429-6654

発行責任者 事務局長 飯沼一元

ホームページを変更しました：<http://byakkotai.club/>